

場面緘黙当事者・経験者と対照群の精神・行動の問題に社交不安、発話、群が与える影響

田中 佑里恵

(京都大学大学院人間・環境学研究科; 現所属: 名古屋大学教育学部編入)



ひまわりプロジェクト実行委員会

問題と目的

場面緘黙 (Selective Mutism, 選択性緘黙) とは

- 他の状況で話しているに関わらず、話すことが期待されている特定の社会的状況において話すことが一貫してできない状態
- 不安症の一種 500人に1人程度発症 発達障害者支援法の対象
- 名称 DSM-5-TR: 場面緘黙 DSM-5, ICD-10: 選択性緘黙

本研究の目的

場面緘黙当事者, 場面緘黙経験者, 対照群の精神・行動の問題に, 発話の程度, 場面緘黙と関連の強い社交不安の程度, 群が与える影響を明らかにする

方法

対象者

		場面緘黙当事者群 (<i>n</i> =5)		場面緘黙経験者群 (<i>n</i> =21)		対照群 (<i>n</i> =9)	
		Mean (SD)	Range	<i>n</i>	Mean (SD)	Range	<i>n</i>
年齢		20.80 (2.95)	18-25	5	21.29 (2.12)	18-25	21
性別	男性			2			3
	女性			3			6
	その他			0			1

当事者・経験者は自助グループ・SNS, 対照群は大学の講義後に依頼

調査内容

ウェブ調査, 以下の質問項目を用いた

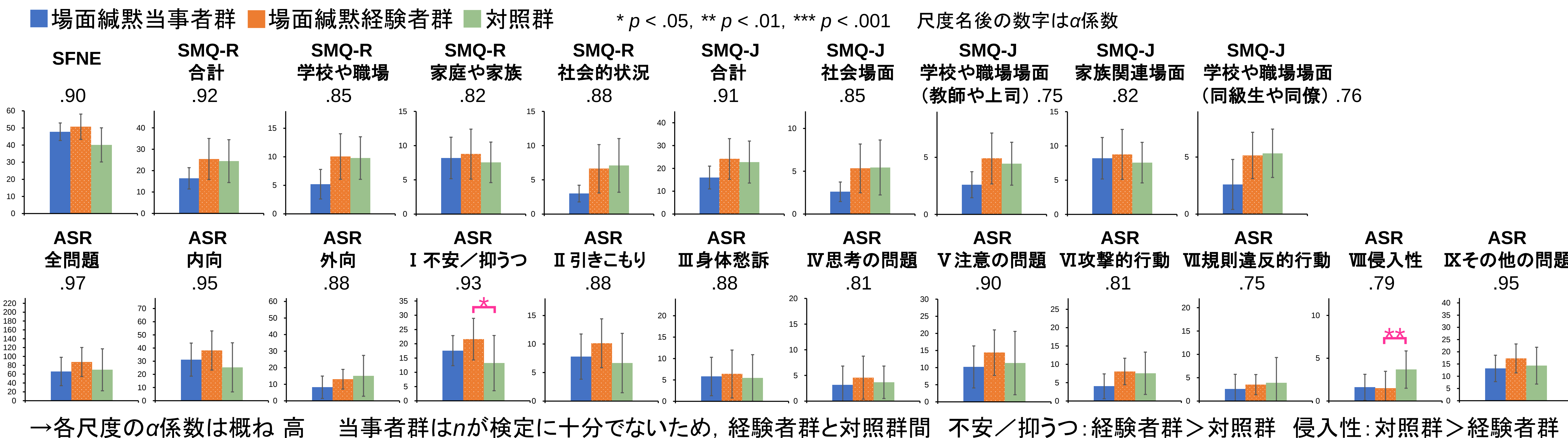
- ASR (ASEBA) 大項目区 尺度 I - IX: 精神・行動の問題 123項目3件法 (0-2)
- SFNE: 社交不安 12項目5件法 (1-5)
- SMQ-R (改変) 兼 SMQ-J (改変): 発話 16項目 兼 15項目4件法 (0-3)

倫理的配慮・利益相反

京都大学大学院人間・環境学研究科人間情報研究・動物実験倫理委員会の承認を得た(承認番号30-H-6) 開示すべき利益相反関連事項はない

結果

全体・群別の記述統計量と信頼性係数および場面緘黙経験者群と対照群間でのウィルコクソンの順位和検定

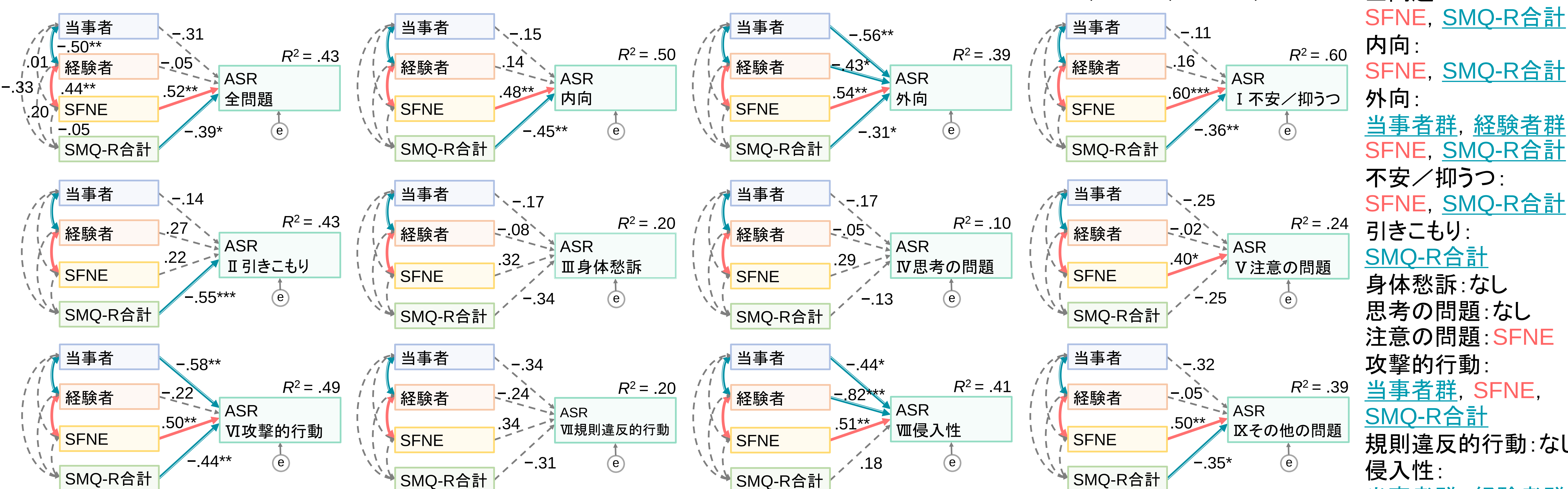


階層的重回帰分析

独立変数: Model 1 対照群を基準とした群のダミー変数, Model 2 加えてSFNE, Model 3 加えてSMQ-R合計またはSMQ-J合計 独立変数間の r は別で算出

SMQ-R合計を用いた場合, Model 3

有意なパスは実線かつ β および r が正のパスは赤色, 負のパスは青色, 非有意なパスは破線 独立変数間の r はASR各尺度のModel 3にて同一のためASR全問題以外で省略 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$



SMQ-J合計を用いた場合, Model 3

SMQ-R合計をSMQ-J合計とした → 有意な独立変数: 外向へのSMQ-J合計の有意な影響がないこと以外, SMQ-R合計を用いた場合と同一 有意水準: 引きこもりへのSMQ-J合計および ΔR^2 が $p < .01$ であったこと以外同一 β および R^2 : いずれも同程度

考察

- 群によらず社交不安の高さは多くの問題に, 発話の抑制は複数の問題に影響 → 特に治療・支援が必要
- 侵入性は経験者, 当事者が, 攻撃的行動は当事者が, 対照群よりも低かった → 行動抑制の表れ, 他者に目立つ行動および能動的・口頭での攻撃の少なさ
- 不安/抑うつは R^2 が高く, β の値より, 社交不安の高さが多く影響し, 発話の抑制も影響
- 身体愁訴, 思考の問題, 規則違反的行動は, 有意な独立変数が見られず, R^2 が低く, 社交不安, 発話, 群以外の要因が影響